

大学生の充実感に関する心理学的研究

—大学生の日常的活動が充実感に及ぼす影響—

峯 野 まどか

1. 目的

今日、「無気力・無感動・無関心」という学生の3無主義やスチューデント・アパシーといった言葉に代表されるように、大学生の無気力感ややる気のなさが問題視されている。しかし、誰もが望んで怠惰で無気力な生活を過ごしているわけではない。むしろ、楽しく、充実した生活を送りたいと願っているのではないだろうか。では、どのように生活すれば、無気力ではなく充実した生活を送れるのだろうか。そこで、本研究は大学生の日常的な活動に着目し、どのような活動への取り組みが充実感に影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

本研究では目的に基づいて、①日常的な活動に取り組む中で、その活動に対してコミットメントを感じるようになり、そしてそのコミットメントがアイデンティティの形成を促進させ、そのアイデンティティの形成過程で学生生活全般に充実感を感じるようになる、②アイデンティティや充実感と、セルフ・エスティームの間には正の相関がある、③年齢や学年が上がるほど、アイデンティティと充実感が高いという3つの仮説を立てた。また、大学生の日常的な活動の中でも、「大学の勉強」、「クラブ・サークル」、「アルバイト」、「人付き合い」という4つの活動を取り上げ、「活動に対する態度項目」を作成した。この活動に対する態度項目と併せて、自己形成的活動に対する肯定的認知評価項目（山田，2004）、多次元自我同一性尺度（谷，2001）、充実感尺度（大野，1984）、セルフ・エスティーム尺度（山本・松井・山成，1982）を用いて質問紙を作成し、大学生・大学院生358名に対して実施し、統計的分析及びその検討を行った。

3. 結果と考察

統計的分析を行ったところ、活動や活動に対する態度・志向が、その活動へのコミットメントに影響を及ぼし、その活動へのコミットメントはアイデンティティの形成に寄与していることが明らかになった。そして、アイデンティティの形成過程で学生生活全般に充実感を感じるようになることが確認された。また、アイデンティティや充実感と、セルフ・エスティームの間には高い正の相関があった。しかし、アイデンティティ及び充実感について学年による違いは見出せなかった。つまり、仮説1及び2は支持されたが、仮説3は支持されなかった。

本研究の結果から、日常的な活動に取り組むことによって、その活動へのコミットメントが強くなり、アイデンティティ形成に寄与すると考えられる。そして、そのアイデンティティの形成過程で、学生生活全般に充実感を感じるようになるといえる。